



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	山田, 祥子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11061号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53787
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiko_Yamada_abstract.pdf, 「論文内容の要旨」



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 祥 子

学位論文題名

ウイльта語北方言の文法と言語接触に関する研究

ウイльта語は、サハリン（樺太）島の先住民族ウイльта（旧称オロッコ）の伝統的な言語である。本稿は、言語接触によりウイльта語に他言語の影響が及んだ可能性を視野に、今日話されるウイльта語北方言の文法を明らかにする研究の、一つの段階を報告するものである。

ウイльтаは伝統的にサハリンの中部から北部にかけてのツンドラや森林地帯でトナカイの群れを飼って季節的に移動しながら、狩猟、漁撈、採集、交易などを行っていた。現在の人口は 300～400 人とみられ、大多数が島中部のポロナISK市（かつての敷香町）や北東部のワール（ヴァル）村に居住している。

ウイльта語は、ツングース諸語の一つで、特に大陸側のアムール川流域で話されるナーナイ語やウルチャ語と近い親縁関係にある。ウイльта語の方言は、上記のポロナISK市を中心とする地方に居住する南のグループが話してきた「南方言」と、ワール村を中心とする地方に居住する北のグループが話してきた「北方言」とに大きく分けられる。

ウイльта語はもともと書き言葉をもたなかったが、2008 年にロシア字を用いたアルファベットでウイльта語を書くための文字教本が刊行され、近年では文字をつかったウイльта語学習が行われている。だが、ウイльтаの人々は普段ロシア語で話すので、ウイльта語が日常生活のなかで用いられることはない。現在、ウイльта語を話せる人は 60 代以上の 10 人に満たないとみられる。近い将来にウイльта語が話されなくなる可能性が高く、ウイльта語の記録・保存が急がれる。

さて、ウイльтаの人々が暮らすサハリンは、ユーラシア大陸の東、北海道の北に位置し、歴史上さまざまな民族集団が交流してきた地域である。大陸のアムール川下流域とサハリンの間は人の行き来が可能で、古くから生業活動の異なる民族集団が盛んに交易や交流を行ってきた。民族集団どうしの接触にともない、言語状況も変化しつづけてきたと考えられる。

ウイльтаをめぐるサハリンの言語状況は、文献からわかる歴史にもとづき、仮説的に三つの段階に分けて整理することができる。第一段階として、遅くとも 18 世紀には、サハリン島内にウイльта、ニヴフ、アイヌが居住し、互いに接触する状況にあった。これらの民族集団は、概して多言語使用の状況を保ちながら、それぞれの言語に共通の特徴が生じたと考えられる。第二段階として、19 世紀中ごろにエウエンキーの集団が大陸からサハリンの北の地方へ移住して来た。ウイльтаとエウエンキーは密接に交流するようになり、エウエンキーの話すエウエンキー語がウイльта語の特徴に影響を与えることとなった。すでに指摘されているウイльта語北方言とエウエンキー語サハリン方言との共通性は、この影響の結果と考えられる。第三段階として、20 世紀前半、サハリンの北部がロシア（旧ソ連）に、南部が日本に領有された。これにともない、北のウイльтаではロシア語、南のウイльтаでは日本語の習得が進んだ。戦後には、サハリンの全土でロシア語が唯一の使用言語となり、ウイльта語を話す人は急速に減少していった。

ウイльта語についての記録は最も古いもので 19 世紀中ごろまでさかのぼることができるが、文法のしくみをとらえようとする言語学的な研究が見られるようになるのは、20 世紀に入ってからのことになる。ウイльта語の文法研究は、20 世紀前半のピウスツキ B.、中目覚、川村秀弥、石田収蔵、潤潟久治、服部健らにより断片的な記録や記述が蓄積された草創期を経て、20 世紀半ば以降、ロシア（旧ソ連）でペトローワ T.I.、日本で池上二良によって体系化された。ペトローワの記述は北方言を、池上の研究は戦後サハリンから日本へ移住したウイльтаの人びとが話した南方言をおもな対象とした。

その後、ペトローワや池上の研究を総合して概説する著述が生み出され、近年ではこれまでの研究を基礎とした国際的な研究交流や、分野横断的な共同も始まっている。しかし、これまでのウイльта語文法研究では、20 世紀半ば頃から今日までサハリンで話されたウイльта語の変化や、南と北

の方言を区別した記述が不足している。ウイльта語の変化や方言差を検討するためには、今日話されるウイльта語を調査し、特に情報の不足する北方言の文法的特徴を記述する必要がある。

2008～2012 年にかけて筆者がワール村およびノグリキ町で行った調査によれば、ウイльта語北方言の音韻と形態構造の根本的な部分は池上二良が記述した南方言の特徴と共通である。ただし、今日の北方言の記述のために新たに規定しなければいけない特徴もある。特に、一部の語の語根を除き母音音素 *o* と *ə* の対立を認めないこと、語構成のプロセスにおいて形態素どうしが複雑に「融合」する場合と、単純に「接着」する場合の揺れが認められることは、今後の記述研究を進めるうえで重要である。

文法について、近年の研究で、今日のウイльта語北方言に見られる動詞語尾 *-li* が動詞語幹について「未来」の意味を加える文法形式であることがわかっている。だが、他に「未来」を表わす形式、および時制に関する他の形式との範列関係は、これまでのところ明らかではなかった。

本稿では、ウイльта語北方言の文法の基本的な枠組みが南方言と共通であると仮定し、動詞の活用形を人称形動詞、非人称形動詞、定動詞、副動詞に分類した。これらは、動詞語幹につく語尾の種類によって区別され、形態・統語的に異なるふるまいをする。この枠組みのなかで、直説法肯定文の述語となる形式に焦点をおいて北方言の動詞活用形を整理した結果、北方言の特徴としておもに以下の 3 点が明らかになった。

第一に、上述の動詞語尾 *-li* は人称形動詞（未来）と位置づけられ、南方言には見られない北方言特有の形式である。今日の北方言の会話で頻繁に用いられるこの形式の存在が、他の形式、とりわけ同じ形動詞で南方言では非過去の機能を持つ *-ri/-si* や、同じ「未来」を表わす定動詞 *-rilA/-silA-*, *-rAŋA/-siŋA-* の用法にも影響を及ぼしている可能性がある。

第二に、非人称形動詞（完了）*-pulA* は、南方言と共通の形式だが意味機能が異なる。南方言の場合、動詞語幹の表わす動作の対象（これを述語とした場合の目的語）が対格であるのに対し、北方言の場合は、それが主格で表わされる。このことから、北方言の非人称形動詞（完了）*-pulA* はヴォイスの転換に関与していると考えられる。

第三に、習慣の語尾 *-bukki/-pukki* は、南方言の先行記述にもとづく文法の枠組みに合わない。特に、この語尾による活用形がとる人称語尾の系列、特殊な複数語尾の形式、およびコピュラ動詞を後に補足して「過去」の事象を表わす点が注目される。

今後は他の分野にも考察対象を広げることによって、この方言の特徴が明らかになってくることだろう。南方言にない北方言の特徴には、エウエンキー語やロシア語など接触言語からの影響が反映されている可能性がある。ウイльта語北方言の特徴とその接触言語の特徴を比較することで、サハリンにおける言語接触の様相も見えてくることが期待できる。

なお、本稿の最後に、ウイльта語北方言のテキストを付録として掲げた。内容は、一人語り 9 篇、会話 1 篇、民話の再話 2 篇、歌謡と詩 5 篇の計 17 篇から成る。音韻・文法のほか、関連する文化的な情報についての写真や注記を加えてある。